



# 月報

No. 435  
2016年  
8月

日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会  
茅ヶ崎市香川1丁目34-35

<http://kagawachurch.jimdo.com/>

## 説教 『主イエスの祈りと十字架』

小河信一 牧師

マタイによる福音書 26章36節～46節

<sup>36</sup> それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行つて祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。<sup>37</sup> ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。<sup>38</sup> そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」

<sup>39</sup> 少し進んで行って、うつ伏せになり、祈つて言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」<sup>40</sup> それから、弟子たちのところへ戻つて御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。<sup>41</sup> 誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」<sup>42</sup> 更に、二度目に向こうへ行つて祈られた。

「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」<sup>43</sup> 再び戻つて御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。<sup>44</sup> そこで、彼ら

を離れ、また向こうへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。<sup>45</sup> それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。<sup>46</sup> 立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

本日のテーマは、祈りです。主イエスのゲツセマネの祈りは、*The Prayer*、祈りの中の祈りと言ってよいものです。ここに、「祈りとは、いったい何であるのか？ 主イエスはどのように祈られたのか？」という答えが見出されます。それは、私たちの祈りの手本とすべきものです。

祈りとは何か、そのことをえる中心聖句として、マタイ26:39と:42を挙げたいと思います。その上で、:39と:42の二節を、:39から:42へという視点で眺めることにします。つまり、ゲツセマネの祈りの一度目と二度目とを比較して、その展開をつかむのです。それは細かな作業のように感じられるかもしれませんが、主イエスが選び抜かれた一つひとつの祈りの言葉です。短い祈りの中の吟味された一句一句、そして、その内に潜む変化と高まりを捉えましょう。そうして、鮮やかに浮かび上がってくる主イエスの祈りを、私たちの心に納めるようにしましょう。

補足ですが、このゲツセマネの祈りは、主の祈り（マタイ6:9-13）と合致するところがあります。

①「父よ」（原文：わたしの父よ）26:39.....マタイ6:9

②「あなたの御心が行われますように」26:42.....マタイ6:10

③「誘惑に陥らぬよう」26:41.....マタイ6:13

主イエスは、祈りの基本である主の祈りを踏まえて、自らもまた神に向かって叫ばれたことが分かります。

それでは、マタイ26:39から:42へという流れに即して、御言葉を読んでいきましょう。

まず、ゲツセマネの祈りが置かれている前後の状況を確認してみましょう。

主の晩餐、イスカリオテのユダの逃走、ペトロへの裏切りの予告、主イエスの逮捕というように出来事が連続する中で、主イエスはゲツセマネの園で祈られました。一説に「わずか」（マタイ26:40）は、二時間あまりの時を指すと言われます。仮に、主の晩餐が二時間伸びていたとすれば、あるいは、主イエスの逮捕が二時間早まっていたとすれば、この祈りの時間は無くなっていたかもしれません。その点では、父なる神の見守りと救いの計画・実行において、父が招き、備えられた、主イエスの祈りの時と言えないでしょうか。

いよいよ十字架の道を進み始められるという際、その前に主イエスは祈られました。これほど、神の大いなる苦難と救いの前にして何をするのか、それは祈りであると、明確に教えられている場面はありません。いざという時、を整えることばかりに気を遣うのか、それとも、沈黙して神との対話に入っていくのか、そうできるように静かに聖霊の導きを求めるのか、が問われています。

マタイによる福音書26:36-37——

<sup>36</sup> それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。<sup>37</sup> ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。

主イエスは、ペトロ、ゼベダイの子二人、すなわち、ヤコブとヨハネ「と一緒に」・「と共に」（meta, という同一の前置詞により:36,38,40）祈ろうとされました（参照：ルカ9:28）。ゲツセマネの祈りは、「汗が血のようにる」（ルカ22:44）ほどに悲しみもだえられた孤独な祈りである、という印象があるのではないのでしょうか。しかし、それと同時に、主イエスが弟子たちに「目を覚ましていなさい」と命じ、一緒に神の御前にひれ伏そうとされたことを看過してはなりません。

主イエスは、十字架の出来事の前に離反するペトロの弱さを見つめながら、こう言われました。

ルカ福音書22:32——

「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

主イエスは、困難の中にいる人、試練に直面している人のために祈る「立ち直った」人を思い描きながら、ペトロに、そのような隣人へのとりなしの祈りを勧められました。人の子、主イエスもまた悲しみのどん底にいる今、ペトロたちに祈られることを期待されたのではないのでしょうか。今、弟子たちにはそれが無理だと見通されていたとしても、彼らが「後で、分かるようになる」（ヨハネ13:7）ことをも念頭に、主イエスは彼らに呼びかけ続けられたのです。

主イエスが弟子たち、人間に寄り添う様子は、「（イエスは）弟子たちのところへ戻って来た」という句（マタイ26:40,45）にも表されています。自分ならば、祈りに集中したい時に、どうして周りの人……眠りこけている人！……にりしないといけないのか、とつぶやくことでしょうか。しかし、「世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28:20）お方は、十字架の道行きにおいても愛の配慮（松永希久夫）を貫かれました。

マタイによる福音書26:37-38——

<sup>37</sup> ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。<sup>38</sup> そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」

要約すると、主イエスは苦難をこうむって「悲しませられ」、その悲しみは「死ぬばかり」に感極まりました。ここで、いったいどうして、主イエスは悲しまれたのでしょうか？ 人の子として、孤独が堪え難かったのでしょうか。確かに、主イエスは感情的に打ちひしがれる人間の弱さをも担ってくださいます。しかしこの場面は、十字架の闇に覆われているところですから、十字架において、主イエスは何を嘆き悲しまれたのか、第一に問うべきです。

詩編88:15——

主よ、なぜわたしの魂を突き放し

なぜ御顔をわたしに隠しておられるのですか。

ここで詩人は、主の御力から突き放されることを、つまり、神と人との関係が途切れてしまうことを、嘆き訴えています。まさに十字架上で、主イエスご自身、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ27:46）と、叫ばれました。主イエスは、ひとり、弟子が裏切り、またひとり、弟子が離反する（知らないと言う）中で、彼らが神から見捨てられることを、深く悲しまれ、それをご自身の身に引き受けられて、十字架にかかれたのです。罪と死に向き合っただけの真剣なこの叫びの内に、「神の御心についた悲しみ」（Ⅱコリント7:10,11）が注ぎ出されています。

このように主イエスは、罪人が抱くであろう悲しみ、苦しみ、不安の中に入って来られました。「ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」（マタイ26:38）の「ここを離れず」の直訳は、「ここに（あなたがたは）とどまりなさい」です。彼らの側から、神との関係を振りほどき、断ち切ろうとする弟子たちに向けられたこの言葉は、ぶどうの木なる主イエスが「わたしにつながっていなさい」・「わたしにとどまりなさい」（ヨハネ15:4）と語られたのと同じです。そこに踏みとどまり、その枝として生きる力は、豊かに実を結ばれる主、十字架と復活の主、イエス・キリストから与えられます。

マタイによる福音書26:39——

少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、このをわたしから

過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」

さてこれが、福音書記者マタイの記録した、一度目のゲツセマネの祈りです。主イエスは地面に倒れ伏し、祈り始められました。この一度目の祈りは、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と「しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」に分けられます。

前半の鍵語は、「杯」で、これは、神からの断絶としての死（J.シュニーヴィント）、飲み干さなければならぬ十字架の死をあらわしています。「過ぎ去らせてください」は「過ぎ越させてください」とも訳せます。それならば、主イエスは「災いをわたしの上に過ぎ越させてください」（参照：出エジプト記12:23）と祈られたこととなります。出エジプトをしたイスラエルの民が信じている旧約の最大の奇跡に基づいて、主イエスは父なる神に訴えかけられたのです。この「過ぎ越させてください」という願い求めの句を聞けば、ペトロたちははっとして飛び起きねばならなかったのです。なぜなら、「今晚、災いがわが家の上を過ぎ越しますように」というのは、イスラエル民族の間に脈々と伝えられて来た祈りの言葉なのですから。

主イエスは今、その民のひとりとなって、神に願われ、そして、これからどんな救いの奇跡が起こるかは、父なる神にゆだねられました。

それが、後半の「しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」です。「わたしが思うようではなく、あなたが思うように」（not as I will, but as You will）という文は、歌うような祈りで、悲痛な中にも平安があふれています（「～のように」はややな言い方のように思われますが、特にそれは二度目の祈りと比較すると分かります）。

マタイ福音書26:42——

更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」

ゲツセマネの祈りは、この二度目において、深められ高められました。全体に、神の御心への恭順・信従が貫かれ、最後には「行われますように」・「成し遂げてください」（:39には無かった語句です）と、父なる神にゆだねています。

私たちは、祈りにおいて、さまざまな願い求めをすることが許されています。しかし、最も大切なことは、「あなたの御心が行われますように」（主の祈りの第三の祈り マタイ6:10）と唱え、神が実行されるのを待つことです。

主イエスは「三度目も同じ言葉で祈られた」と何気なく書かれていますが、二度目の最高潮の祈り、つまり、主イエスの父なる神の御心に対する確信が揺らがなかったという点に留意したいと思います。自分を省みると、言葉の下から自分の願い求めに舞い戻ってしまいそうです。主イエスは、二度目、三度目と、「神の御心が成し遂げられますように」という祈りの輪の中に、私たちが入って来るように招いておられます

主イエス・キリストは、「あなたの御心が行われますように」との祈りをささげるばかりでなく、ご自身が御心を行う者となってくださいました。ここで、「御心が行われる」というのは、「主の十字架が成し遂げられる」こと、十字架と復活による救いの業が全うされることを指しています。

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」（マタイ26:39）という出エジプト的な救いを求める祈りの結果、どうなったのでしょうか？ 実は、ゲツセマネの二度目の祈り・前半「この杯を過ぎ去らせてください」から、主イエスまたは人間と十字架との関わりが良く見えてきます。

「過ぎ越させてください」という願いから、十字架の出来事を観ると、私たちの頭の上、私たちの家の上は過ぎ越して、茨が冠とされた主イエスの頭の上は過ぎ越さなかった、のです。一方、神の怒りと災い

は、剣もろとも、十字架上の主イエスを直撃しました。主イエスが、世の罪を取り除く神の小羊として犠牲になってくださいました。他方、悔い改める者への神の赦しによって、私たちは神の怒りと災いをこうむることはありませんでした。ここに、旧約の出エジプトと過越祭を基としながらも、それをはるかに超えた神の奇跡、神の恵みがあらわされました。主イエスがまことの犠牲、過越の小羊になることによって、私たちにとって「この杯を過ぎ去らせてください」との願い求めは、御父により聞き入れられた祈りとなったのです。これが、私たちの思いをはるかに超えた「われをも救いし くしき恵み」（讚美歌Ⅱ編-167番）、驚くべき神の御業です。

主の十字架において、常に神の大いなる御業を知らされることこそ、私たちの祈りの生活の土台です。

茅ヶ崎香川教会月報

No. 435

2016年8月28日発行

編集発行：日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会

発行責任者：小河信一

編集責任者：鈴木隆二